

同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と柘植六郎教授と宮澤賢治（17）

若尾 紀夫（C昭39・院41）

柘植六郎教授を詠った作品（Ⅳ）

前号（第131号）に続き、賢治が詠った「著者」（7, 8, 13）を取り上げた。

著者

造園学のテキストに、おのれが像を画あまり、
著者の原図と銘うちて、かゝげしことも夢なれやと、
青き夕陽の寒天や、U字の梨のかなたより、
革の手袋はづしつゝ、しづにをくびし歩みくる。

「著者」とは誰か：信時哲郎氏（13）は、盛岡高農の小泉多三郎助教授・山田玄太郎教授・柘植六郎教授を挙げて論じ、「著者」は柘植教授のことであろうと推察している。筆者は、「著者」とは明らかに賢治が学んだ盛岡高農の恩師「柘植六郎教授」であると考え。

造園学のテキスト：柘植教授（農学科）は園芸学が専門で、園芸及び園芸実習を担当していたが、教授の講義や著書では「造園学」という分野には言及していない。盛岡高農の創設時から林学科の講義に「造林学」はあったが、「造園学（定盛兼助教授担当）」の開設は昭和4年のことである。従って、賢治は在学中に「造■学」の授業を受けたことはない。

造園（装景・ランドスケープアーキテクト）の歴史が古いことは周知のことであるが、我が国では明治期に入ってから造園学教育が始まり、また関連した多くの資料が発行された。大正7年発行の「造園概論：田村 剛」（1）の序文で、本多静六は「我邦に於て未だ嚴肅なる學術的研究によつてなされたる造園学一予は敢て造■学と言ふ一の（このような）著書を見たことがない。」と述べていることから、この頃までには造園学が定着したと思われる。

賢治は園芸や造園に大変関心を持ち、大正13年4月、花巻共立病院の佐藤隆房医長の依頼で病院中庭の花壇を設計、『花壇工作』や『病院の花壇』の作品がある。

おのれが像：柘植教授は盛岡高農在職中に数多くの専門書（本報 第131号）を著し、それらの表紙に自分自身の肖像写真を掲載している（実験果樹園芸新書：第131号掲載）（写真1, 2）。



写真1 実験果樹園芸新書（明治43年11月）

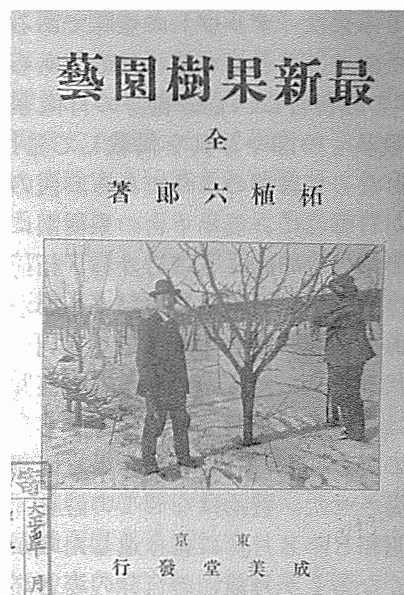


写真2 最新果樹園芸（大正14年1月）

著者の原図：著書には、数多くの写真や図が掲載されている。柘植教授は趣味として油絵を描き絵の素養があったので、それらの図は自分自身で描いたものであろう。因みに、最新果樹園芸（写真2）では図・写真275、果実等の図・写真205を数える。

寒天：寒天はジャムや羊羹などの食品に汎用されるが、微生物の培養実験では必須材料で、寒天溶液や固化した寒天は不透明で濁った状態になる。賢治は、このような寒天の特徴を作品の表現に用いた。

青き夕陽：赤い夕陽は明日に希望があるような明るい雰囲気、青い夕陽は暗い憂鬱な気持ちを表している。

革の手袋：著書に掲載されている写真（鮮明ではないが）から、果樹を剪定する時には革らしき手袋をはめていると思われる（写真2）。

U字の梨：果樹の燭台仕立（カンデラブル）の一つで、特に2本の側枝を出したものはユウ（U）字形整枝（左）、ユウ字形を2本連結したものは複ユウ字形整枝といわれる（写真3）。

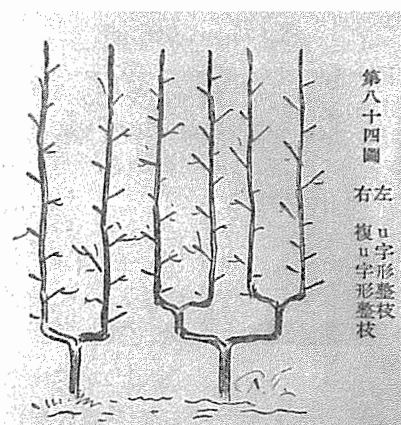


写真3 ユウ（U）字形整枝

おくび：本来は「ゲップ」の意味であるが、賢治は「欠伸：あくび」として使ったのであろう。

「造園学の教科書に、自分自身の肖像写真や自分で描いた数多くの図や写真を掲載して発行したが、それも今となっては夢のようである。西の空がどんよりとした日暮れに、農場下台の果樹園にあるU字形仕立ての梨の木の方から、柘植教授が今日の剪定作業をおえ、革手袋をはずしながら疲れたようすであくびをしながら戻ってくる。」

そんな状況を詠ったものであろう。盛岡高農在学中の賢治は、農場の果樹園で梨の木を剪定している柘植教授の姿を観察、その時の様子を回想して「著者」に登場させた。賢治はなぜこの詩を「文語詩稿五十篇：昭和8年8月」に書き遣したのか。賢治は当時（亡くなる1ヶ月前）の自分の姿と高農時代の恩師・柘植教授の姿とを重ね、自分をカリカチュア

（戯画化）し自嘲する様子を回想風に描いているのか（13,15）。

柘植六郎教授の文部省視学委員としての履歴

柘植教授は、文部省視学委員に任命され幾つかの県に出張している。関連する履歴を下記に掲載した。

- ・明治42年12月11日：盛岡高等農林学校教授ニ任ス
- ・大正4年10月20日：文部省視学委員ヲ命ス（文部省）
- ・大正4年10月30日：学術上取調為青森県八戸町へ出張ヲ命ス
- ・大正5年9月2日：文部省視学委員ヲ命ス（文部省）
- ・大正5年9月4日：学術上取調為石川新潟富山三県下へ出張ヲ命ス
- ・大正5年9月15日：学術上取調為山形市へ出張ヲ命ス
- ・大正10年10月25日：文部省視学委員を命ス（文部省）
- ・大正10年10月25日：学術上取調為宮城岩手二県へ出張ヲ命ス（文部省）
- （校友会報 第43号：大正10年12月25日）
- ・大正11年1月12日～24日：宮城岩手両県へ出張ス
- （校友会報 第44号：大正11年12月18日）
- ・大正14年3月31日：依願免本官

文部省視学制度について

視学制度は戦前における教育監督制度であり、明治32年以後に教育の専門家を構成員とする特別な組織として制度化された。文部省におかれていた視学官（文部省官制）の他に、地方にも視学官・視学・郡視学（地方官官制）が設置され、後者には教員あるいは教育関係官職経験者が当てられた。学校現場では教育内容や方法に関する指導監督が行われた（3）。

文部省視学委員としての視察と所感

柘植教授は、3度文部省視学委員に任ぜられ各地（青森・石川・新潟・富山・山形・宮城・岩手）に出張している。盛岡高農で文部省視学委員になった他の教授は、門前弘多教授（昆虫学専門）（宮城県出張：昭和6年1月19日）のみである。公式の視察報告書などの資料が入手できないので、殆どの視察内容は不明である。幸いなことに、宮城岩手両県に関しては岩手日報の記事（大正11年1月）が残されている。

宮城岩手両県への視察：所感と農学校の実情

柘植教授は、大正10年10月25日、文部省視学委員を命ぜられ、翌年1月12日より24日（12日間）、宮城岩手両県へ出張・視察した。その時に岩手日報が取材した新聞記事（写真4,5）は、視学委員とし

實際を離れた

學理のみの教育

岩手宮城兩縣下農學校を
通じての大缺點
拓植高農教授談

文部省視學委員として宮城岩手兩縣下農學校を視察したる拓植高農教授談
拓植高農教授の視察感想に曰く「私は今回九校につきて其校の教授法を視察したが、概して實物に近い教授をして居るものは皆無と云つてよい。これは地方農學校としては誠に遺憾な事であると思ふ。九校中實物を教材として授かる以前に一回教へられた事

写真5 岩手日報記事（大正11年1月27日）

兩縣下農學校を

視察しての所感

文部省視學委員

拓植六郎氏談

盛岡高等農林學校教授拓植六郎氏は文部省視學委員として本月十二日より十日間宮城岩手兩縣下の農學校視察をなしたるが其視察後に曰く「宮城県にては宮城県立農學校を初め小牛田、栗原、柴田、亘理の五校、岩手県にては胆澤、江刺、稗貫の農蚕學校及び岩手県立農學校の四校、合計九校視察した。何れも郡制廢止を控へて県立に移管するといふので活氣附いて居る。宮城県では先づ十一年度から県立になる栗原農學校は丁度私が出張中に県会が県參事會をして之を議決せしめ建築費拾貳万円

写真4 岩手日報記事（大正11年1月26日）

ての拓植教授の所感及び當時の農學校の實情を知ることができる貴重な資料である。以下その全文をあげる。

岩手日報（大正11年1月26日）

兩縣下農學校を視察しての所感

文部省視學委員 拓植六郎氏談

盛岡高等農林學校教授拓植六郎氏は文部省視學委員として本月十二日より十日間（注：校友会報の記録では十二日間）宮城岩手兩縣下の農學校視察をなしたるが其視察後に曰く

『宮城県にては宮城県立農學校を初め小牛田、栗原、柴田、亘理の五校、岩手県にては胆澤、江刺、稗貫の農蚕學校及び岩手県立農學校の四校、合計九校視察した。何れも郡制廢止を控へて県立に移管するといふので活氣附いて居る。宮城県では先づ十一年度から県立になる栗原農學校は丁度私が出張中に県会が県參事會をして之を議決せしめ建築費拾貳万円

の予算で新築するといふのである。又全十二年度に於ては柴田、亘理の農蚕學校は県立となる筈にて、共に改築費七八万円づゝ支出する事に決定したとの事である。
栗原農學校は高等一年より連絡をとり四年制度の學校で教授方法も一特色ある。教員にも出来る丈専門の学科を担当せしめる事とし、職員はすべて實習する事として居る。其結果は極めて良好である。柴田亘理の二校は勿論乙種程度であるが県立移管と共に甲種にしたいと画策中である。こうして移管と共に新築することになってゐるが其間學校に位置の爭奪など聞かない。私の見るところでは柴田農學校の如

きは位置を変更した方はよいと思う程である。すべて位置の選定は實際上及將來の事を考慮して第三者から見て適當の地を決せねばならぬ。例えば本県の農事試驗場の胆江分場の如き、又江刺農業學校の如き、地方農蚕業の爲に不誠意の結果だと思ふ。又設備に就きては同じ金を使用するのであるからよく考慮せねばならぬ。胆澤の農學校の如き折角新築しながら、惜しむべし旧式の小学校に則つた恨みがある。

教授上の不便と此校舍において受くる不快の感とは、如何に教授上に及ぼすか又寄宿舎にしても其れが設計に際して日光に対する考慮を没却し、寒国にあり乍ら防寒の設備を閑却してゐる。又食堂の如きは最も生徒をして快感を与ふる様にせざるべからざるものなるに、あだかも穴の中にある様や不快をそゝる様に建つてゐる。のみならず寄宿舎への通路になつてゐるは思はあざるも甚だしい。校舍としては先づ完備しあるは宮城農學校である。

以前に視察した時とは全く面■を異にしよく整頓され種々の実験室も建築されて教員は各自実験する事は出来る様になつてゐる。岩手農學校は教室は何れも狹隘にして而も極めて不足している事と、校舍の頽廢して居る事は実に今回視察したる甲種學校中の第一である』と獨り教授上に關する懇切なる批評もあるが他日に譲る。

岩手日報（大正11年1月27日）

實際を離れた學理のみの教育

岩手宮城兩縣下農學校を

通じての大欠点 拓植高農教授談

文部省視學委員として宮城岩手兩縣下農學校を

視察したる柘植盛岡高等農林学校教授の視察感想に曰く、

『私は今■九校につきて其授業方法を視察したが、概して実物に近い教授をして居るものは皆無と云ってよい。これは地方農学校としては、誠に遺憾なことであると思ふ。九校中実物を教材として授業して居るものは僅に一人を見た許りで図を以てして居るものは一人も無い。斯くの如きは実業学校の一大欠点であらねばならぬ。特に乙種の学校に於て此感は深い。皆教科書に囚はれて本の講義に過ぎない。私は盛岡校（注：盛岡農学校）で試みに講義の終わりに生徒に対して其授業中の筆記して置かねばならぬ点と覚えて居らねばならぬ点と以前に一回教へられた事はあったか否かと云ふ事に就いて質問して見たが、三十二人中解答の出来たもの僅に八人のみ、其理屈の了解されて居る生徒は一人も無かった。如何に授業上講義中生徒を引きつけて其大切な点を注意せしむる事は肝要であるかは判る。只単に教科書の講義に終ったならば折角の授業教育は空論に走つて了ふ。その生徒は地方に帰農した際、教科書では覚えた筈のものが実物に就きて戸惑ひする事となる。こうして学理と實際は益々離れて其結果農業の普通塾を収めたに過ぎぬ事となる。畢竟するに実験室の設備はないため教員各自が時間の間に次の時間に講義する用意は出来ない処にも起因する。自己の実力より以下の講義をせねばならないから、其用意は必要である。又教材たるべき標本、実物、及び図書を購入の費用はないと云ふ事であるが、最もこの点無理もない事ではあるが、然し実業学校の標本の如きは金を出して一時に揃えたと云ふ事は出来ぬものである。故に教員自身で標本はつくらねばならぬ又いくらかつくり得るものである。この事は独り生徒に対してのみならず自分自身の修養ともなり。口で許り教授するよりは實際を見せ図解する時、生徒が目から享受する利益は、偉大永遠のものである。

この欠陥のあるは要するに今日の教育は真剣を欠いて居るからだと云ひ度い教員達は図はない、標本はないと云ふて居ると遂には各自の将来の向上は遅滞し、教場で誤りを教える事は多くなり実に憂慮すべき結果を招く事となる。標本の自製は出来ない。と云ふ事は其受持時数は多過ぎるとか自分の不得意の学課を受持つと云ふ原因もあろう。此点から見れば栗原農学校の成るべく専門の課目を担当せしめて居るのは良策と思ふ。又図書の少ないのは何れの学校も同じ事だが之は県なり郡なりで漸次揃えてやらねばならぬ。又痛切に感じたのは農具の設備のない事である。何れの学校も殆んど地方農家と選ぶ処はない。少なくとも現在農家より一歩進んだ教育をせざ

るべからざる農学校で此事を見るは一大欠陥であらねばならぬ』と

柘植教授が視察した農業学校は、宮城県5校（宮城県立農学校・小牛田・栗原・柴田・亘理）、岩手県4校（胆澤・江刺・稗貫農蚕学校・岩手県立農学校）である。校舎・実験室・寄宿舍・食堂・防寒の設備などの教育施設は不十分劣悪であり、また図書・教材・農具などの教育備品も殆ど備えられていない。どの学校も地方農家と同じレベルである。更に教師の教育に対する姿勢や方法についても、「真剣さが欠ける」と厳しく批判している。例えば、■・実物・標本を用いない授業、教科書に囚われた授業、授業の準備不足、適材適所でない教師の配置、実際（実学を重視した農学校の理念）からかけ離れた学理のみの教育であると指摘している。

このように柘植教授は視学委員として訪問した宮城岩手両県の農学校の実情を厳しく指摘している。それは恐らく全国に共通する課題であろうが、当時の東北地方の農学校のおかれた劣悪な教育環境を反映していると思われる。

柘植六郎教授の稗貫農学校視察と宮澤賢治

賢治 稗貫農学校に赴任

稗貫郡農蚕講習所（明治40年5月開所）を前身とする郡立稗貫農学校（2年制乙種）は、大正10年5月25日に開校、大正12年4月1日には郡制廃止に伴い県立に移管して岩手県立花巻農学校（3年制甲種）となる。賢治は、大正10年12月3日に稗貫農学校に赴任し、英語・代数・肥料・作物・農製・土壌・化学・気象などの科目を教え、大正15年3月31日に退職したので在職期間は4年4ヶ月となる。

柘植教授の稗貫農学校視察

柘植教授は、視学委員任命（大正10年10月25日）後の翌年、大正11年1月12日より24日まで、宮城（5校）岩手（4校）両県を視察したが、その12日間に9校を何時どのような順序で訪問したのか、また稗貫農学校を何時視察したのか不明である。しかし、柘植教授の訪問は、賢治が稗貫農学校に赴任した直後のおおよそ40日以内であることは間違いない。

柘植教授が稗貫農学校を視察した調書がないので詳細は分からないが、同農学校に関する視察所感も、概ね先に述べた岩手日報記事に重なるものであろう。

稗貫農学校視察の際に、柘植教授は賢治と会ったのであろうか。柘植教授は、賢治の盛岡高農時代の恩師であり、両人が学校で親しく再会したと考える

のが自然であろう。視学委員としての公式訪問であるので、柘植教授が赴任直後の新米先生賢治の授業を参観したこともあり得ることである。

柘植教授と賢治との再会が、農学校教師の賢治にどのような影響を与えたのか。柘植教授は賢治からどのような印象を受けたのであろうか。

新米先生 賢治と変身

賢治が稗貫農学校の教師になった直後（大正10年12月）に保阪嘉内に宛てた手紙（書簡199）がある。「・毎日学校へ出て居ります。何からかにからすっかり下等になりました。・学校で文芸を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。・」このように賢治は「授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。」と自嘲している。

教え子たちの数多くの証言がある（2,4,6,10）。

福田（及川）留吉（1年生・賢治の授業を最初に受けた教え子）：「先生は授業にお馴れになっていなかったのでしょうか。最初の頃は早口で板書で私ども生徒はなかなかその講義に追いつけませんでした。“ちっともわからん。ちっともわからん”とみんなで連発・・・」

浅沼政規（2年生）：「生徒を背に黒板に説明しながらどんどん書いていく。それが実に早い。横に書く、斜めに書く、図を画く、すきのあるところのどこにでも書く。話がおもしろいと聞いているとノートが運れる。先生の話はどんどん進んでゆく。」

福田留吉：「その後先生の授業は、かなり緩やかになり回を重ねるにつれてだんだん丁寧さを増し、どの授業も非常にわかり易くなりました。豊富な知識とユーモア、そして生徒の稚拙な質問にも嫌味やおっくうさのない親切な説明で本当に授業は楽しいものになりました。」

小原 忠（大正12年入学）：「私が入学した頃はもうすっかり落ちついたもので、教師も板についていて、宮沢先生こそ先生になるために生まれて来た人のようにほんとうに思いました。授業は明快そのもので、生徒を飽かせるようなことはありませんでした。」

このように教え子の回想を時系列的に辿ると、賢治の教師像は次第に変化してゆくことが分かる。元もと学校の先生になる積りはなかった賢治は、暫くの間は、生徒の指導や授業は手探りの状態であったが、その後新米先生は変身した。

賢治は、教科書に囚われない授業、多くの自作の絵図・標本・模型（岩石や鉱物、土壌や肥料、地質図や土性図など）を使った実践的な授業を行った

（5）。教え子の回想にあるように、賢治の教え方や生徒への向かい方（教え子の個性や状況を把握し、就職や進学を世話したうえに、卒業後も教え子の安否を気遣った）から、教師としての天性の資質を備えていたように思える。

当時の稗貫農学校の教育環境（校舎や寄宿舎などの施設、図書や教材など）も、恐らく柘植教授の指摘のように粗末であり、また教育の仕方も批判されることが多かったであろう。しかし、柘植教授が手厳しく批判した点について、視察後の賢治は実践していた。つまり賢治の生徒たちの指導や教育は、柘植教授の視察所感とは真逆であった。柘植教授がこのように変貌した賢治の姿をみた時、どのような感想を持ったのであろうか。

柘植教授の視察が賢治にどのような影響を与えたのか？ 榊 昌子氏（9）は、「芋虫が蝶に変身する大きな役割を果たしたのは、一つには柘植教授の視察だったのではないかと述べているが、柘植教授との再会が変身の重要な転機になったことはありうる。

柘植六郎教授の退職

盛岡高農を退職（依願免本官：大正14年3月31日）した柘植教授の記事が岩手日報に掲載されている。停年を前になぜ早期退職したのか詳細は不明であるが、教授本人及び家族の療養であったといわれる。

岩手日報（大正14年3月14日）

高農の両部長 惜しや勇退す

柘植氏と柳澤博士

「盛岡高等農林学校農学部長柘植六郎氏ならびに獣医学部長柳澤銀蔵博士は今年年末を期して勇退することとなった。柘植氏は明治三十九年講師として全校に教鞭をとり全四十二年教授となり更に大正2年農学部長となり今日まで二十年間という長い間農学研究に没頭し本県農業発展のためにも貢献されたことが尠くない。その間米国にも研究のため一年ほど留学した・・・」

兵庫県立農業補習学校教員養成所長

盛岡高等農林学校を辞した柘植教授は、大正14年10月7日、兵庫県加古郡平岡村（現・加古川市）にあった兵庫県立農業補習学校教員養成所長（第2代）として赴任、昭和5年3月31日まで在籍した。

実業補習学校は、明治26年に「実業補習学校規定」

により発足、明治27年に「実業補習学校教員養成」が始まり、明治32年には農業・商業・工業の各教員養成所において実業補習学校の教員養成が行われることとなる。全国の実業補習学校（農業・商業・工業・水産など）は14,228校（大正9年）あったが、その中でも農業補習学校が圧倒的な数（74%）を占めていた。初期の実業補習学校の教員は大部分が小学校教員の兼務であった。

このような実業補習教育制度を充実させるために、専任教員の養成が要請され「実業補習学校教員養成所」(大正9年10月)が開設された。その一つが、兵庫県立農業補習学校教員養成所（神戸大学教育学部の前身）(大正12年4月設置)（11）で、柘植教授は同養成所が設置されて2年後(大正14年10月7日)に第2代所長として赴任した。

全国の実業補習学校は、予算措置が不十分で設置理念と実質が伴わない小規模のもので、果樹園芸学の大家で盛岡高農教授であった柘植六郎にとってそこは何時までも留まる場所ではなかった。

秋田県立鷹巣農林学校長

柘植六郎校長の秋田における足跡

柘植六郎は、昭和5年3月31日、秋田県立鷹巣農林学校長（第5代）として赴任。健康上の理由で同校を退職（昭和13年10月8日）するまでの在職期間は9年間にもおよんだ。その間、柘植校長は経済農場の開拓や農林産加工など鷹巣農林学校の経営・発展に大きな功績を残した（12,14,16）。

- * 模範経済農場の新設：米代川沿岸の町有地を無償で借り受け、生徒自らの手で農場を開拓し、学校経営の自給自足を目指す5ヶ年計画を立てた。水田の開墾、各種農産物（甘藷・トマト・西瓜など）の栽培、畜産事業（養豚・養鶏・養兔）、森林造成、製炭法の研究など。
- * 農林産物加工：林檎酒・林檎ジャム・林檎果汁・トマト果汁・醤油味噌・乳酸飲料（ラクミン）・各種缶詰など農産加工品の開発と製造、林産加工品の製造。農林産物加工設備の整備と農林加工科の新設。
- * シカゴ万国博覧会への出品（昭和8年6月）：農林学校として東北で唯一の参加で、農産加工品・林産加工品・農民芸術品・木彫・農薬用品などを出品。
- * モルサップ（乳化養毛液：桑の根から抽出した特殊成分）の発明と製造。

このように柘植校長は経済農場の新設や農林産加工教育の推進など様々な計画を立案・実践したが、その背景には柘植校長が過ごした盛岡高等農林学校の創立理念と伝統があると思われる。柘植校長はかつて盛岡高農時代に文部省視学委員として多くの農学校を視察し、その教育状況を批判し憂慮したが、その反省として自身は農林学校における実学（学問の実践化）を積極的に推し進めた。

柘植校長の鷹巣農林学校における功績は、地元新聞記事「惜しまれる柘植校長 功なりて退く」（秋北新聞：昭和13年10月10日）（16）が物語っている。

「昭和五年四月以来鷹巣農林学校長として在職九ヶ年、特に農産加工科の設置と共に各種の発明品に輝く足跡を残された柘植六郎氏は、農産加工界に於て全国的に声明あり功成り名遂げて退くことになった健康が許さぬ為自ら退いて東京に移住されるそうだが一般にも知己親しみが多く非常に惜しまれている。」

賢治の秋田における足跡

羅須地人協会：花巻農学校を退職した賢治（大正15年3月31日）は、農民芸術活動や農業指導（肥料設計や稲作指導など）など農村建設を目指して農耕自活の生活を歩みはじめ（4月1日）、羅須地人協会（8月23日）を設立した。しかし、過労や栄養不良などで健康を損ね、羅須地人協会は終焉することになる（昭和3年）。

東北砕石工場技師：当時、東磐井郡陸中松川（現・東山町）にあった東北砕石工場（工場主・鈴木東蔵）では、石灰岩を採掘し石灰岩末・搗粉・壁材料などを販売していた。鈴木東蔵は、花巻に賢治を訪ね石灰岩の採掘や宣伝・販売などの協力を打診（昭和6年2月21日）。賢治は東北砕石工場技師となる契約を結び、その時から昭和8年9月21日に亡くなるまで同工場技師として働いた。

賢治が東北砕石工場技師を引き受けた背景には、盛岡高等農林学校の存在があった。それは地質・岩石・鉱物・土壌を専門とする賢治の恩師・関豊太郎教授（地質及土壌教室）（明治39年）であり、関教授との出会いは賢治の生涯に大きな影響を与えた。

関教授の研究分野は多岐にわたるが、酸性不良土壌にも関心を持っていた。関教授は石灰岩末による酸性不良土壌の改良を奨励し、岩手に無尽蔵に存在する石灰岩で不毛の酸性土壌の中和改良が可能であると提唱した（談話「石灰岩新利用」岩手日報：大正6年11月）。このような関教授の考えは賢治に深い感銘を与え、やがて東北砕石工場技師としての働きに結びつくことになる。

花巻農学校教師として北海道修学旅行に行った際に提出した「修学旅行復命書」(大正13年5月)には、「(石灰岩末は)酸性土壌地改良唯一の物なり。早うかの北上山地の一角を砕き来りて我が荒涼たる洪積不良土に施与し草地に自らなるクローバーとチモシイとの波をつくり耕地に油々漸々たる禾穀を成ぜん。」と賢治の熱い思いが書かれている。

賢治の秋田における足跡：東北砕石工場技師となった賢治は、酸性不良土壌の改良を目指して岩手・青森・宮城・秋田などを回り肥料用炭酸石灰(石灰岩末)の普及・販売に奔走した。賢治は秋田にも何度か足を運んだ。その足跡は鈴木東蔵宛の書簡(昭和6年4月13、20、21、22、29日付)から窺い知ることができる。関連する部分を下記に抜粋した。

[書簡327](昭和6年4月13日)

次に私事本日は気分漸く清快にて熱も退き候間前三日を経て宮城へ出張致すべくその節は朝工場へ御立寄の上色々御指示を得べく候 今後の私の小案としては左の如くに御座候 七、秋田県購聯に大量を持ち込む

[書簡329](昭和6年4月20日)

一昨日は参上色々と難有御礼申上候 要件左の如くに御座候 九、然るに宮城県へ向ける分にては甚手間に合はざる点も有之候間お指図を得て秋田へ売込致し度右記至急御指図願上候、一、秋田県庁、農会、組合聯合会、県試験場、陸羽支場、諸農学校、組合(各地)へ合計五日位の出張 旅費計三十五円位

[書簡330](秋田市にて)(昭和6年4月21日)

御指令に仍て本日当地に着、農務課並びに県農会、県購聯を歴訪致し専らに説明に務め候処いづれも充分の諒解を得候 今回の出張は只今として全然失敗に了り候。就ては旅と等一切私持にて帰花致すべく候 今日角館の旧同級生、明日は大曲の試験場を訪ひ更に諒解を得置度存候

[書簡331](横手にて)(昭和6年4月22日)

本日は大曲よりやけくそに各組合及農会を歩き候処犬も歩けば棒に当るの式にて当地にて果樹組合主催の恩田博士講演会あり右に出席致し山内村長清水川氏の非常なる同情を得近日中に一二車取纏め呉る、由何卒御安心願上候

[書簡332](前沢駅にて)(昭和6年4月29日)

昨日は横黒線廻りを致し候処同地方何か前よりの行き掛りの事情あるらしく一車をも得ず空しく帰花仕候 然るに本日は晴天にて当前沢にて三車注文請取候

賢治は秋田に炭酸石灰を売り込む予定を鈴木東蔵に相談し、承諾をえて出張。その経路は、黒沢尻(現・

北上)、(横黒線：秋田横手と岩手黒沢尻間)、横手、(奥羽本線)、県庁・県農会・県購聯・県試験場・諸農学校などへの訪問、角館、大曲(農事試験場陸羽支場・各組合・農会)である。しかし、秋田での注文をとることが出来なかった。

書簡330(昭和6年4月21日)によると、賢治は秋田市から角館に立ち寄り旧同級生・河原田次繁を訪れて同宅に一泊した。河原田次繁は角館の河原田家の出身(17代当主)で、盛岡高農・農学科第2部に入学し賢治とは親しい間柄であった(写真6)。河原田家の庭には樹高20メートルほどのユリノキ(チューリップツリー)の巨木がそびえているが、それは賢治が持ってきて植えたものであるという(14)。秋田に遺された賢治の足跡の一つである。

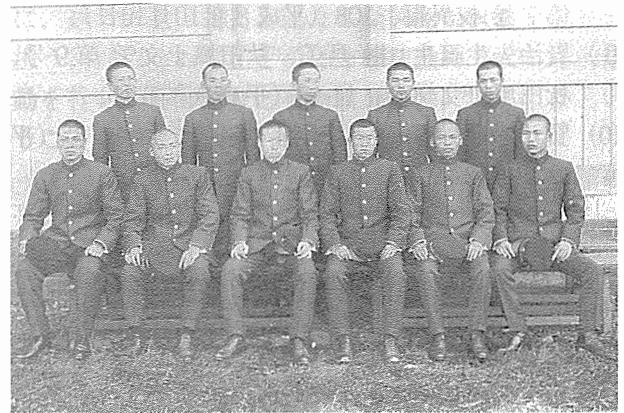


写真6 盛岡高農・農学科第2部(大正4年入学)
前列左3人目：宮澤賢治
後列左側3人目：河原田次繁

賢治は柘植六郎校長と再会したのか

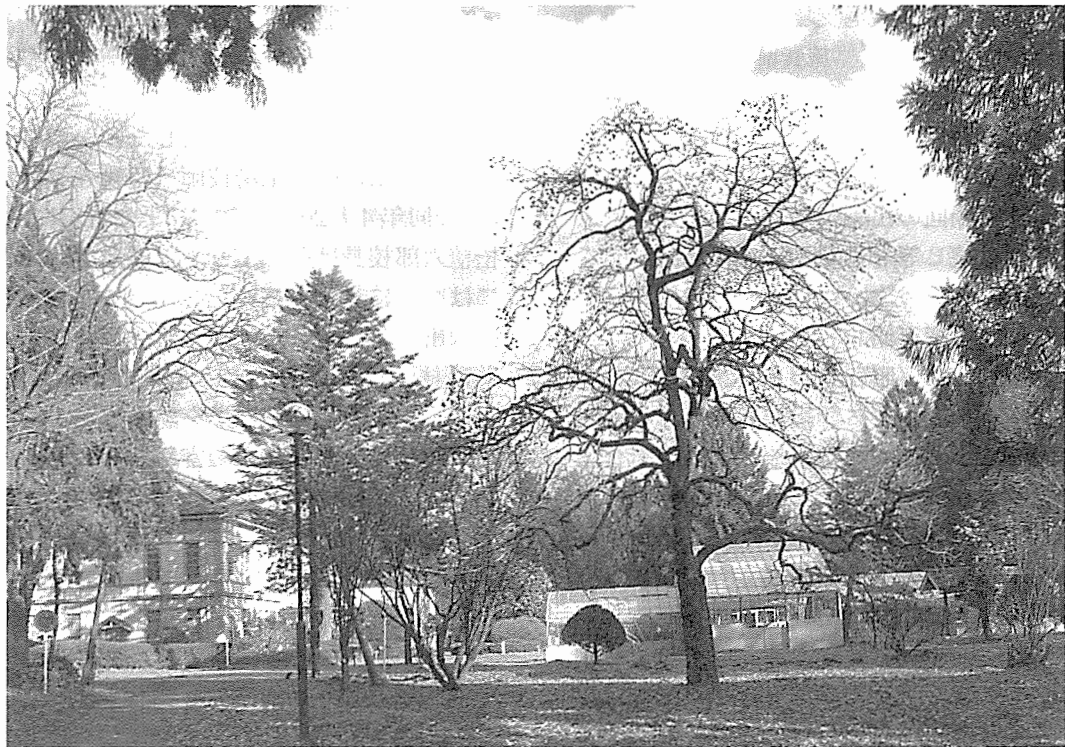
賢治が東北砕石工場技師(昭和6年2月21日)となり、同年4月20日から29日まで秋田に出張したが、柘植六郎校長はそれより1年前(昭和5年3月31日)には鷹巣に赴任していた。従って、2人は時期的には秋田で会う機会がありえた。賢治は柘植教授が鷹巣農林学校長であることを知っていたのか。もし知っていたとすると鷹巣を訪問したであろうか。賢治が鷹巣農林学校に立ち寄ったとの記録はみられないので、柘植校長との再会はなかったと思われる。

本稿をまとめるに当たり、榊 昌子氏、河田弘美氏、秋田県立秋田北鷹高等学校には貴重な資料を提供して頂きました。ここに謝意を表します。

参考資料

- 1) 造園概論：田村 剛、成美堂書店(大正7年7月21日)

- 2) 宮沢賢治 地人への道：佐藤 成、川嶋印刷（株）（昭和59年10月25日）
- 3) 新教育学大事典 3：第一法規出版、384-385（平成2年7月）
- 4) 写真集 先生はほほ〜つと宙に舞った：塩原日出夫・鳥山敏子、自然食通信社（平成4年7月20日）
- 5) 証言宮澤賢治先生：佐藤 成、農文協（平成4年7月）
- 6) 宮澤賢治 外伝：佐藤 成、でくのぼう出版（平成8年12月31日）
- 7) 文語詩稿 五十篇：宮澤賢治全集、筑摩書房、第7巻 本文編、37（平成8年10月10日）
- 8) 文語詩稿 五十篇：宮澤賢治全集、筑摩書房、第7巻 校異編、108（平成8年10月10日）
- 9) 賢治先生誕生：榊 昌子、秋田風土文学 第9号、秋田風土文学会、11-18（平成9年6月）
- 10) 賢治の実践学白書：佐藤 成、ようけい舎（平成9年12月31日）
- 11) 『神戸大学教育学部五十年史』：神戸大学教育学部五十年史編集委員会編、139-145（平成12年11月）
- 12) 秋田県立鷹巣農林学校百周年記念誌（平成21年）
- 13) 宮沢賢治「文語詩稿 五十篇」評釈：信時哲郎、朝文社（平成22年12月）
- 14) 柘植六郎五代鷹巣農林学校長と宮沢賢治の邂逅：河田弘美、鷹巣文化遺産保存会誌「おんこ」26号、26-31（平成26年10月）
- 15) 宮沢賢治と本田静六の接点—新資料が発見された経緯から：吉見正信、賢治学 第2輯、29-36（平成27年6月10日）
- 16) 県立鷹巣農林学校 柘植校長九年間の足跡：河田弘美編集（平成28年）



旧本館（農業教育資料館）横の柿の古木